

ほなひ歴史通信

第24号

2002.9.1

講演会後の会話から

去る七月二十六日（木）、茨城県郷土文化研究会の平成十四年度総会があり、午後からは県立図書館と共催の記念講演が同館の視聴覚ホールで開催された。前々からのいきさつもあって、どうしても講師を引き受けざるを得なくなり、約二時間ほど十数年来研究テーマとしてコツコツと積みあげてきたもの一端を紹介した。

題して「ホンモノ、ニセモノの世界」近世水戸の書画をみるというものであった。内容は著名な水戸藩主・藩士の書画のホンモノとニセモノを映像を使って比較検討をするというものであった。

例年だと総会終了・昼食後になるので講演会への参加者は多くて五十人前後であるのに、今回は百人位が集まってくれた。講演の途中で席を見渡すと会員以外の人が半数以上であった。そのなかには、高萩市・土浦市・下館市などの知人の顔もみられた。また県内の古美術商の方も数人顔をのぞかせていた。

「私の話なぞ耳が汚れるだけだから、後で耳を洗うのが大変ですよ」などと冗談を言いつつも、やはり多くの人が聞きに来てくれたという事実は大いにありがたかった。

講演終了後に何人かの県内市町村博物館・資料館の学芸員や担当者が挨拶に来てくれた。常日ごろから案内状や招待状が届けばなるだけ積極的に足を運んで見学させてもらい、展示物や解説について、自分勝手な意見を言ったり無理な見解を求めたりしているの、「さては、質問コーナーで敵討ちされるのかな」と疑ってみたり、「いつも館に来てくれることに対する義理のユイがえし」かと思って、冗談交じりに何人かに話をしてみた。確かに他人の時は知らんぶり、自分の所へはぜひ来てくれではむしがよすぎる。

ところが、私の予想に反して返ってきた言葉は「義理でワザワザ来るか！この暑いのに」というものであった。「本音をいえば、少しぐらいはそういう気持ちがあったかも知れないが、むしろ今後の館の企画展や展示構成の参考になる何かを掴み取った」という肯定的な返事が多かった。

現在、公立の博物館や資料館は展示物のマンネリ化、企画展の行き詰まり、見学者の減少、運営予算の削減など多くの問題点を抱えていると聞く。そうなると、館の企画・運営はアイデア勝負、ひとえに学芸員の力量にかかってくる。みな少しでもより良いものをめざして必死になっているのであろう。会話の端々からは悲鳴にも似た悲壮感が漂っていた学芸員もみられた。これも担当者としての責任感のなせる業か、だとすれば今後の活動に大いに期待できよう。

（吉成）

八溝嶺神社の遠鳥居について④

飯村 尋道

『浅川の遠鳥居』、棚倉町の『大梅の遠鳥居』、黒羽町の『南坊の遠鳥居』、同じく黒羽町の『西郷の遠鳥居』について、今回は『大生瀬の遠鳥居』と『池田の遠鳥居』について紹介します。

【大生瀬の遠鳥居】

常陸国久慈郡大生瀬村打越（大子町大生瀬打越）にある。川山から久慈川を渡り大生瀬の弓取り峠への道は、里美太田街道で「水戸様の通った道」（古老談）でもある。

遠鳥居は、弓取り峠への登り口である打越の字「斗時」にありました。遠鳥居のあった境内は、平らに整地され、「出羽三山」や「東掌山」などの古い供養塔などもあって、八溝山遠鳥居跡の面影を残しています。

地元の斉藤光明さん宅に遠鳥居の扁額が保管されていると聞き見せていただいた。

扁額は、縦七十八糎、横四十三糎の栗材で、造りは浅川や南坊のと比べると小さく粗末だが、材質の痛み状況からかなり古いものである。秀麗な筆致で正面に『八溝嶺神社』と浮き彫りで墨で描かれているだけで、あとは何も書かれていない。浅川や南坊の扁額のように、漆や金箔は塗られてなく質素な造りであり、扁額の下縁は失われ、新たに杉の板で補修されている。浅川や南坊の扁額は『八溝山』の三文字に対し、ここは『八溝嶺神社』と五文字である。

斉藤さんによると「昭和三十年頃まで立っていたが、杉のひとかかえ位の太い柱で危険性があったので取り壊した。二十一年位前までは、旧四月十七日の八溝山のお祭りの時は作神様である八溝山に五穀豊饒を願い、ここでムシロすいでオミキアゲをやった。今は前にある大樗と樗の木が大きくなって、八溝山が隠れて見えないが以前はよく見えた。」という。

【池田の遠鳥居】

常陸国久慈郡池田村下の馬場坪（大子町池田）にある。馬場の地名の起りは「鏡山」に出城があった頃、ここに馬の練習場があったがこの名がついた。「（地元の古老談）という。

遠鳥居のあった場所は、部落の共有地で、元はカヤ場だったそうです。

今は、篠やススキが生い茂り、ここが遠鳥居のあった清浄な地とは、とても思えないような所です。石仏や石塔もなく周囲を人家に囲まれ、遠鳥居跡の面影はまったくありません。

池田の遠鳥居について、地元の岡村正太郎さんによると、七八十年前の子供の時の記憶として、

「大きくてかなり太く赤身の芯だけ残ったボコボコした鳥居の柱が、一本倒れていて乗っかったりして遊んだ。四月十七日の八溝山のお祭りの時は、部落の人がここに集まって、オミキアゲをした。テザカナ、お煮染め、赤飯など持ち寄ってオミキアゲをした。いたのを記憶している。」という。

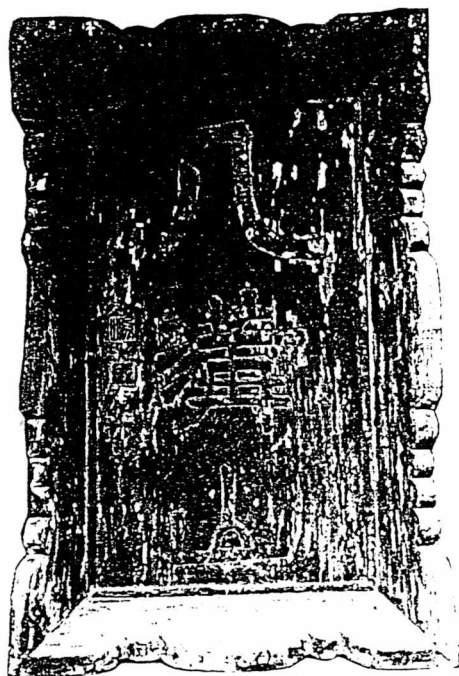
八溝山は、昔はここからよく見えたが、今はホテルと竹藪の影になって見えない。また、扁額があったのか如何か、それもわからない。しかし、鳥居には扁額がつきものである。柱は倒れ朽ち果てても、扁額はある意味ではご神体であり粗末にできるものではない。おそらくは地元の神社などに保管され、そのまま忘れ去られているのではないだろうか。

池田の八溝嶺神社の遠鳥居について、何かご教示いただければ幸甚に存じます。

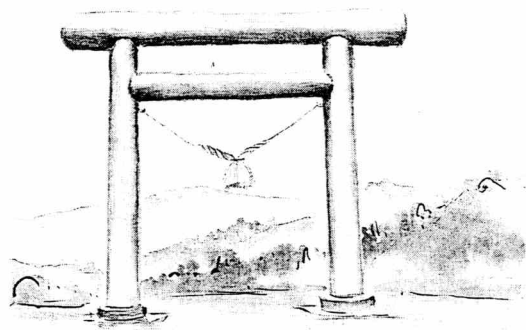
（大子町立下野宮小学校勤務）



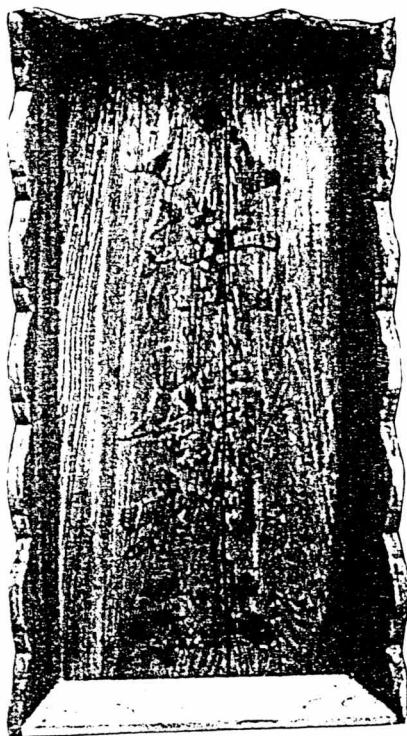
南坊の遠鳥居の扁額（黒羽町南坊）
（縦97CM×横60CM）



浅川の遠鳥居の扁額（大子町浅川）
（縦124CM×横80CM）



浅川にある八溝嶺神社の遠鳥居



大生瀬の遠鳥居の扁額（大子町大生瀬）
（縦78CM×横43CM）

男体山南連峰の 鷹取岩の由来

男体山は、大子町と水府村の境界に位置する。標高約六五四メートルである。男体山の西側から南側は、三〇〇メートルにも達する急な断崖絶壁をなし、起伏傾斜とも非常に大きい。北側から東側は、傾斜比較的ゆるやかな斜面になっていて、その景観は、古舞屋敷から見ると、雄大さに迫る。男体山の山容と断崖の奇岩の雄大さに圧倒される。古舞屋敷の弘法堂から男体山の南連峰を見ると、円筒形に突き立った穴だらけの岩山と人の姿や猿の姿に似たような岩山が目にとまる。地元の人は、前者を鷹取岩、後者を入道岩などと呼んでいる。

八月の暑い日だった。私が弘法堂を訪れたとき、弘法堂前の駐車場で、立ち話をしていた。三人の地元の人に会った。年齢好も七十歳を越えていたように思われた。私が鷹取岩や入道岩の由来について尋ねると、その中の一人の男の方が東の断崖を指さしながら、「私が聞いてきた鷹取岩は、その断崖のいちばん端の岩山、入道岩はそ

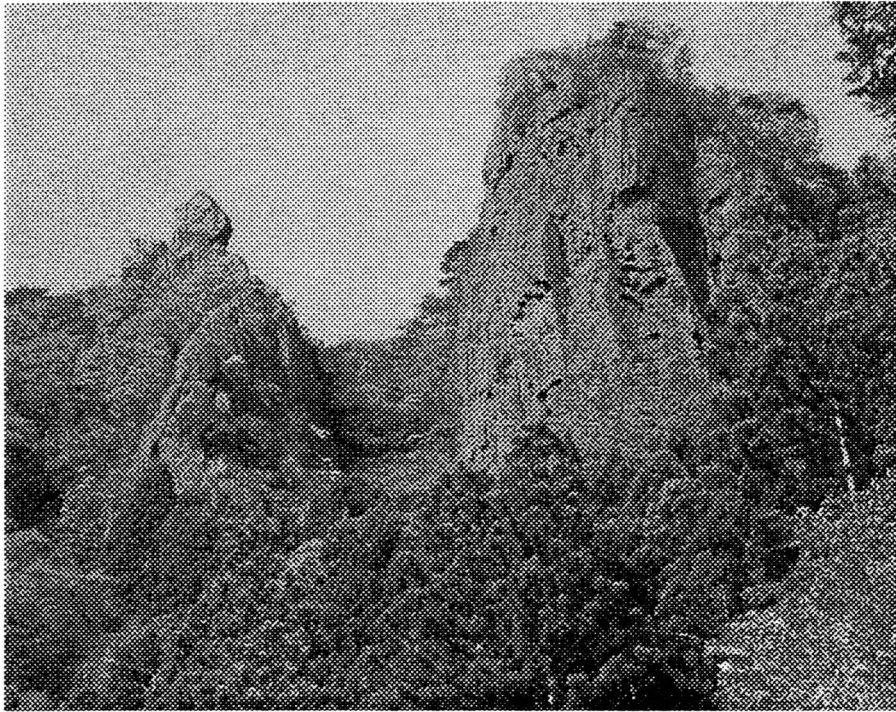
の手前の人の形をしたような岩山、鷹取岩は昔大鷹が子供をさらった逃げ隠れたところと聞いています。入道岩は、ねんね（赤らん坊）を背負った格好をしているところから、ねんねこんぶ岩などと呼ばれる話などかす」と話ってくれた。地元の話などからまとめると、鷹取岩について次のような由来がある。

今からおよそ三五〇年前というから、江戸時代の初期のころの出来事である。

鷹取岩の中腹に、一羽の大鷹が住みついていた。大鷹は、時折餌を探し求めて、人家の周辺に舞い降り、放し飼いをしている元の人たちから恐れられていた。

年の瀬の迫ったある晴れた日のことである。与平さん夫婦は、子供を外で遊ばせながら、家の近くの小屋の中で炭の俵づめを鳴が聞いた。突然子供の「キヤー」という悲鳴が聞こえてきたので、子供に何か起こったのではないかと、急いで小屋の外にでて見ると、一羽の大鷹が子供を両足で抱え、断崖の岩穴の方へ向かって飛び去って行った。

大鷹に抱えられ、泣き叫ぶのが子を見ながら与平さん夫婦は、打つ手もなくどうすることもできなかつた。落ち着きを取り戻した与平



男体山南連峰の入道岩と鷹取岩

さん、小屋に立てかけてあった竹で槍を
つくり、小屋の中にあつたロープと竹かご
を持ち、大鷹が逃げ去つていった断崖を
ざして吹っ飛んでいった。

大鷹は、鷹取岩の中腹の岩穴に住みついて、鷹取岩の死骸を大鷹の死骸を見て驚いた。大鷹の死骸の羽を広げるとなつて大鷹の羽を藩主に献上したところ、藩主も驚き、この断崖の岩山を鷹取岩と命名したという。

鷹取岩については、もう一つの言い伝えがある。徳川光圀が太子地方巡村の折り、この岩山を登ったとき、光圀の家来が岩山に巣くつていた大鷹を射落としたところから名付けられたという。一つの地名に二つの由来があるのも興味深い。

(小澤)

平日教室は静かだった

今の教科には、道徳とか生活、社会科など昔とは違うものがある。国語・算数(算術と言った)・理科・音楽(唱歌)・体育(体操)・図工・美術(図画・工作)は同じだが、昔は修身(今の道徳)・地理・国史(社会)などがあり、高学年には農業実習(男)・裁縫(女)などもあった。綴り方(作文)や書き方(習字)も独立した教科だった。

教科の第一は修身で、週一時間は必ずあった。嘘をついてはいけないとか、親には孝行を、兄弟仲良く、友達を大切にとかいうことを例え話を使って先生がしんみりと話してくれる。生徒は授業になると椅子にきちんと腰かけ、姿勢を正しくする様に躡られていたので、みんないい姿勢で聞いている。だから先生の話がよく身に沁みたようだ。よく、修身の様に徳目を教えるのはよくないという考えもあるが、どういうことが正しいのか知識として知ることも重要なことだと思う。

時には校長先生が来て話をしてくれる。みんなよけい緊張して聞く、話を聞いたり本を読んで感動したことは、人生に大きな影響を与えるものだ。

今の社会科に代わるのが地理・国史(殆ど日本の事しか勉強しなかった)で、地図を描いたり、歴史の話聞くのは特に楽しかった。無駄話をする者などなく、教室は静かだった。

理科は四年生から、国史は五年生から勉強することになっていった。だから国史などは他の学年が帰った午後になるので、授業の時間はまったく静かだ。

私の学校は分校だった。先生は二人、教室も二つ、一・二・五年生と、三・四年生に別れていた。一人の先生が三つの学年

を受け持っていた。朝は集団登校など無く、それぞれに登校する。教室では来た順に国語の本を出して読み始める。次第に人数が増えてきて教室は「わあわあ」という読み声で一杯になる。これが毎日だから、しまいに全部覚えてしまう程になる。「読書百遍意おのずから通ず」音読は大切な基本だと思う。

そのうちに先生が、職員室の窓から首を出し「チリン・チリン」と鐘を鳴らす。みんな一斉に音読を止めて、外へ出る。「予鈴」が鳴って、休み時間というわけだ。

次に鐘が鳴ると「本鈴」で、一斉に教室に入り勉強が始まる。

昭和十六年に国民学校となり教科は国民科・理数科・体操科・芸能科などに大別され、戦時色の強い表現になった。特に体操科には体操のほかは武道や、高学年では軍事教練などが行なわれた。

太平洋戦争中は、小学生でも高学年になると供出薪運びの勤労奉仕や、防空壕掘り、食料増産の畑仕事などの時間が多くなり、勉強に身が入らなくなった。

それでもみんな真面目で本気だったから楽しかった。

本を読む姿勢、字を書く時の姿勢、立って読む時の本の持ち方、鉛筆の持ち方、机の中の整頓の仕方、何でも細かく躡られた。生涯の基本を身につける所が小学校だと思う。昔の学校は先生の教えが身に沁みてよかったと思う。(石井)



ランプから電灯へ(二)

—未点灯集落解消への取り組み—

今日、電気は生産・生活を支える不可欠なエネルギーとなっている。例えば、生活の領域をみよう。電気洗濯機、電気冷蔵庫、テレビやエアコンなどは二台以上所有する家庭が増えている。さまざまな電気製品に囲まれた今日の生活スタイルは、もはや電気というエネルギーなしには考えられないほどである。

こうした、電気に依存した生活の原型はかつての高度経済成長期につくられたとみてよいが、その同じ時代、一部とはいえ電気の恩恵を受けられず、暗いランプの生活を余儀なくされる人たちがいたこともまた事実である。とくに茨城県は、未点灯家屋の数が全国的に多い地域であり、その茨城県にあつては久慈郡に、そして久慈郡にあつては大子町に未点灯家屋が比較的多くみられた。

電気のある生活がすでにごく当たり前になっていた時代、厳しい条件を乗り越えて電気を引き、未点灯集落を解消するため一九五〇年代から六〇年代にかけて多大な努力が傾注された。本稿では、その取り組みの模様を跡付けてみたい。

電気が供給されない農山漁村(未点灯集落)、あるいは電気が十分に供給されない農山漁村(電力不足地域)に対して、政府は一九五一年度から融資制度を設けて電気の供給促進に向けた対策に乗り出すが、本格的な取り組みは、五二年十二月二十九日に農山漁村電気導入促進法が制定されて以降のことである。この法律は五一年六月頃から準備され、議員立法によつて提案され成立したもので、その後六回の改正を経ながらも電気導入促進

対策の制度的骨格をなすものとして機能し続けた。

法が謳う制度の内容を簡単にみておこう。まず目的であるが、「電気が供給されていないか又は十分に供給されていない農山漁村に電気を導入して」当該地域の生産力の増大と農山漁家の生活文化の向上を図る、としている(第一条)。食糧増産対策に重点が置かれた時代であつただけに、とくに生産過程の電化による増産効果に大きな期待が寄せられていたようである。事業は、都道府県知事が作成する「都道府県農山漁村電気導入計画」、それをもとに農林大臣が定める「全国農山漁村電気導入計画」に沿つて実施された。一口に電気を導入するといっても、導入の方法は地域の条件によつて異なってくる。①水力、火力、風力などによる自家発電方式、②共同受電方式、③一般受電方式の三つの方法があり、そのいずれかを選択するわけだが、③の方法が一般的であつた。茨城県も例外ではない。電気導入の事業主体については、農林漁業者が「組織する営利を目的としない法人」(第二条)とされており、具体的には農協、土地改良区、森林組合、漁協などが担当した。

事業の実施には多額の資金が必要であつたから、受益者の負担を軽減するため長期低利の融資制度や国からの補助制度が用意されていた。ここでは補助制度について、とくに一九五九年三月の第四次改正について付言しておこう。つまり、従来は開拓地及び離島振興対策実施地域が補助対象であつたのだが、五九年の改正によつて「経済的に遅れており、かつ、電気の導入に関する条件が著しく悪いため農林漁業金融公庫からの資金の貸付のみでは電気を導入することが困難であると認められる地域」、いわゆる僻地が対象に加えられたのである。未点灯集落を解消するうえで、この措置のもつ意味は大きかつた。

参考文献 農林省『農林行政史』第十巻

(斎藤)

【史料紹介】

常市山石鉄道株式会社創立願

県立歴史館には、明治二十九年と三十三年「各鉄道敷設願関係書類」三簿冊が所蔵されている。明治二十二年に水戸と小山間の水戸線が開通、明治二十八年に友部と土浦間、翌二十九年に土浦と田端間、三十年に平と水戸間、明治三十一年八月に常磐線の全線が開通した。当時の鉄道敷設が盛んな時期に、高浜町と郡山町を結ぶ常磐鉄道の計画について紹介しよう。

明治二十九年五月一日の「常磐鉄道株式会社創立願」によると、その路線は、日本鉄道高浜町停車場を起点とし、竹原・堅倉・小幡・長岡・水戸・瓜連・大宮・山方・頃藤・袋田・大子・下ノ宮から福島県に入り、東館・石井・棚倉、浅川を経て日本鉄道郡山町停車場に至る一四四キロである。

敷設する理由として、「特に高浜・郡山の地は茨城・福島両県物産最多の地にして、また、両県交通の要衝たり、今や我が国、鉄道の業、大いに開け、それ常陸におけるもの中央に水戸線あり、東海岸に常磐線の布設せらるるあり、また、南土浦線の全通近きあり、しかるに北、岩代（福島県中部および西部）に達する道ひとり鉄道の設けなく、物産多しといえども、運輸交通その便をえるあたわず、したがって、殖産興業の途もまたその歩を進むあたわず、これ実に地方人民の遺憾とするところなり。」という。

その工事に関しては、「高浜水戸間 地勢おおむね平坦、かつ通過する所の土地は田畑原野にして、工事最も軽易なり 水戸大宮間 水戸は人口二万五千余の市街にして茨城県庁その他諸官衙の所在地たり、水戸大宮間は地勢最も平坦にして、土地はすべて田畑なるをもつて、工事最も容易なり、しかれども、水戸市常磐公園付近において日本鉄道線路を横断し公園地下に隧道をうがち、那珂川に橋を架するの工事ありといえども、さ

まで至難というにあらず 大宮大子間 山方は人口三千余、頃藤は人口二千余、袋田は人口二千五百余の地にして、当地方著名の所なり、大宮大子間の線路は久慈川に沿うて山脚を通過しこの間において、延長五鎖（一〇〇・五メートル）内外の小隧道四ヶ所を要し、久慈川に二ヶ所の架橋を要すといえども、さまで至難の工事にあらず、この近傍の山林最も良材多し 大子棚倉間 大子は人口四千余の所にして、当地方において最も繁華の地なり、当地方に産する蒟蒻玉は当地に持ち出し水戸をへて東京その他に運送す」と述べている。

また、太田町から郡山町への常磐鉄道は、太田町の前島由兵衛らが中心になって出願する。県は明治二十九年六月に「一般交通経済上有利之事業と認められ候」という副申を添えて通信大臣に申請したが、明治三十一年六月十日却下（差し戻し）となった。この通知には「明治二十八年十二月九日出願常磐鉄道株式会社発起並に鉄道敷設の件、聞き届けがたく、よつて願書却下す」とあり、前島由兵衛ほか六七名宛てとなつている。 県北の発展を願う人々の期待のもとに、明治三十二年に水戸と太田間が開通、大正六年に上菅谷と大宮間、昭和二年に大宮大子間、水戸と郡山を結ぶ水郡線の全線が開通したのは昭和九年である。創立願いから三十八年後であった。（野内）

編集人 斎藤 典生（茨城大学人文学部）

野内 正美（茨城県立歴史館）

石井喜志夫（元 教員）

小澤 圀彦（大子町教育長）

吉成 英文（大子町社会教育課）

井上 和司（大子町税務課）

編集発行 遊史の会

大子町立中央公民館歴史資料室発行

久慈郡大子町大字池田二六六九番地

三九三五

〇五七二六七